

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

時間的展望と環境意識や行動との関係

著者	村松 陸雄
雑誌名	武蔵野大学環境研究所紀要
号	3
ページ	47-57
発行年	2014-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000280/

時間的展望と環境意識や行動との関係

Relationship between time perspective and environment consciousness and environmentally-conscious behavior

村 松 陸 雄*
Rikuo Muramatsu

We do not inherit the world from our ancestors; we borrow it from our children.

Native American proverbs

自然とは祖先から譲り受けたものではない。子孫から借りているものだ。

アメリカ先住民の言い伝え

問題

「我ら共有の未来」(Our Common Future)、「持続可能な未来のための教育」(Education for Sustainable Future)、「懐かしい未来」(Ancient Futures)、「フューチャーセッション」(Future Sessions)等々…、人間と環境のあり方を考える上で貴重な示唆を与える言葉には「未来」の文言を含んでいることが多いような気がする。このことが事実かどうかは別として、環境について思い巡らせるときに、「未来」時制を抜きにして考えることができないことは紛れもない事実であろう。

他方、論文検索サイト Google Scholar の検索窓の下に書かれた言葉「巨人の肩の上に立つ (Stand on the shoulders of giants) の意味をご存知であろうか。これは、(諸説あるが) 12 世紀のシャルトル学派のベルナールが古代の学問を巨人に喩え、「自分たちは小さな人間であるが、巨人の肩に乗ることで巨人よりも多くのもの、遠くのものを見ることができる」と言ったことに由来するとされる。換言すると、研究や学識とは、「過去」時制における多くの偉大な先人の才能や努力の蓄積の上に成り立っているという学問のあり方の王道を示唆する金言である。

環境学に関しても、他の学問ディスプリンと同様に、「過去」時制の知見を積み上げることで成立している。このこと自体は、至極真っ当なことではあるが、「過去」から学ぶことを基本姿勢とした学問を範として修学した環境学徒が、未来展望力や未来社会を構想する力をどうしたら獲得できるようになるのか。

昨今、若い世代の時間的展望については、主として研究者から構成される学界だけでなく、世

*環境学部教授

間の衆目を広く集めるトピックスとなっている。就職氷河期、リーマンショック、未曾有の自然災害、少子高齢化の進展など社会文化的状況により、若い世代が「未来」に希望を見出すことが困難となり、「現在」志向が非常に強まっているという言説に対して、論壇において活発な議論が風発している（玄田，2010；古市，2011；宇野・濱野，2012）。

レヴィン（1951）は、「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」を時間的展望（time perspective）と定義し、個人の行動が、現在の事態のみに依存しているのではなく、未来に対する願望や、過去の自分の事態によって影響されるとして生活空間における時間次元の展望が重要であることを示した。レヴィンの研究を契機として、発達心理学と教育心理学に関連した研究分野で、時間的展望に関する研究が数多くなされている。例えば、アイデンティティ発達やキャリア展望を理解するために、「過去」「現在」「未来」の不可逆な時間軸の連続性を念頭に入れた時間展望に関する研究知見が蓄積されている（都筑・白井，2007）。

質問紙法や社会調査法に基づいた環境意識と行動に関する研究は、全容を把握することが困難といっても過言ではないほど極めて多数報告されているが、大方の論文が、「過去」「現在」の視座での研究で、「未来」もしくは時間的展望に着目した研究はほとんどなされてこなかった。

本研究の目的は、これまでの時間的展望研究で精緻化した研究手法を用いた質問紙調査に基づき、（1）環境学を専攻する大学生の時間的展望を把握すること、（2）時間的展望と自然との一体感、環境意識と行動との関係を解明することである。

方法

実施時期：

2013年6月上旬

調査対象者：

東京都内の私立大学で環境学を専攻する大学1年生51名（男性21名、女性30名）。

調査手続き：

質問紙調査に基づき実施した。著者が担当する授業の終了時に質問紙を配布し、翌週に回収した。

質問紙の内容：

①サークル・テスト：

Cottle（1967）と日潟（2008）を参考に、「過去・現在・未来がそれぞれの円で表されると仮定して、あなた自身の過去・現在・未来について、あなたが感じていることを最もよく表すように3つの円を描いてください。描き方は自由です。違う大きさの円を描いてもかまいません。円を重ねて表現してもかまいません。描き終わったら、それぞれの円に過去・現在・未来のどの円を表しているものなのかを表示してください。あまり考え込まずに思いのまま感じたとおりに描いてください。」と教示して尋ねた。

②時間的展望の測定：

時間的展望体験尺度（白井，1994）を用いた（付表1）。下位尺度は「現在充実感」（5項目）、「目標指向性」（5項目）、「過去受容」（4項目）、「希望」（4項目）の合計18項目である。「とても当てはまる」（5点）から「全く当てはまらない」（1点）の5件法で尋ねた。逆転項目は補正して得点を与え、各下位尺度の平均値を得点とした。

③自然との一体感の測定：

Schultz（2001）を参考に、「あなたと自然との関係について伺います。あなた自身と自然との関係を最も適切に示した図に○をつけてください。」（図1）と教示して尋ねた。

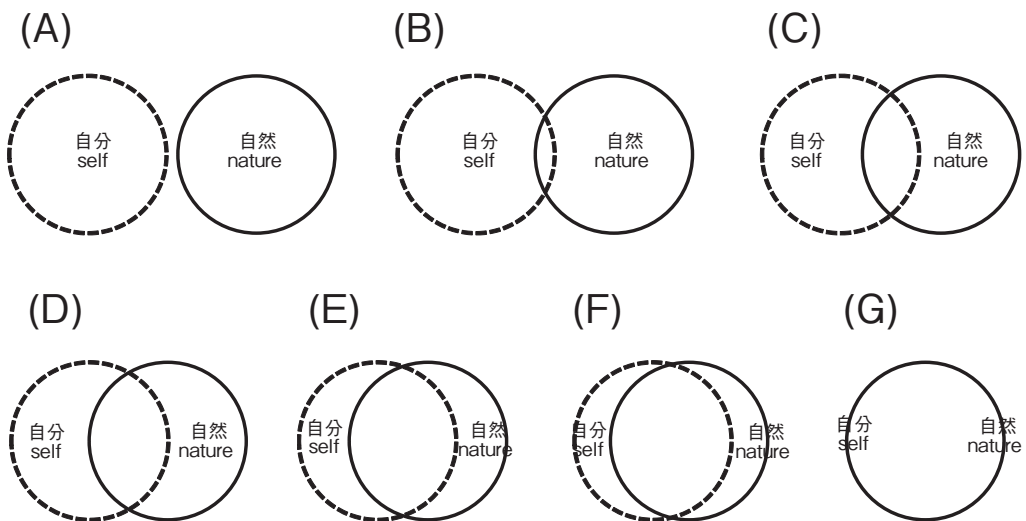


図1 自然との一体感尺度

④環境意識と行動の測定：

エコロジカルマインド評価尺度（田中・城，2010）に「環境問題に対する関心」を追加して用いた（付表2）。測定した尺度は「環境問題に対する関心」（7項目）、「責任感」（2項目）、「有効感」（2項目）、「危機感」（1項目）、「実行可能性感」（2項目）、「負担感」（3項目）、「社会規範感」（1項目）、「環境配慮的意識」（3項目）、「環境配慮的行動」（3項目）、「自己効力感（効力予測）」（3項目）、「自己効力感（結果予期）」（3項目）の合計30項目である。自己効力感（効力予測）と自己効力感（結果予期）は「全くできない」（1点）から「十分できる」（5点）の5件法で、環境配慮的行動は「ほとんどしない」（1点）から「いつもする」（5点）の5件法で尋ねた。その他の項目は「全くそう思わない」（1点）から「非常にそう思う」（5点）の5件法で尋ねた。逆転項目は補正して得点を与え、各尺度の平均値を得点とした。

サークル・テストの分析方法：(図2)

①時間的優位性：

過去の円が一番大きく描かれているものを「過去」、現在の円が一番大きく描かれているものを「現在」、未来の円が一番大きく描かれているものを「未来」、すべての円が同じ大きさで描かれているものを「同じ」と分類した。なお、顕著に大きさが異なると判定できないものも「同じ」として判定した。

②時間的関連性：

日潟 (2008) に基づき、3つの円が完全に離れているものを「原子型」、交わっているものを「交わり型」、円が他の円に包含されているものを「包含型」として分類した。

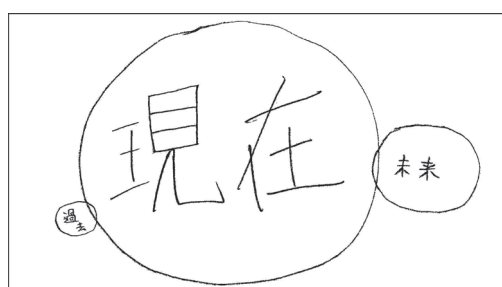


図2 サークル・テストの分類例 (「現在優位型」「交わり型」)

結果と考察

時間的優位性と時間的関連性

図3に、サークル・テストの時間的優位性の割合の結果を示す。割合が高い順に「未来」(43.1%)、「現在」(29.4%)、「過去」(19.6%)、「同じ」(7.8%)であった。時間的優位性の割合が、大きい順に「未来」、「現在」、「過去」となる結果については、大学生を対象者とした既往研究の知見を支持する結果といえる。ただ、この結果は、日潟 (2008) が大学生を対象とした調査結果、「未来」(54.1%)、「現在」(30.8%)、「同じ」(8.9%)、「過去」(6.2%)と比べて、「未来」の割合が低下している。80年代から90年代に大学生を対象とした先行研究では、日潟 (2008) の結果よりもさらに未来優位性が高い傾向が示されている (例えば、都筑, 1984; 渡邊・赤嶺, 1996)。

奥田 (2013) は、1970年代から2010年代までの大学生の時間的展望の歴史の変遷を検討した結果、1980年代、1990年代、2000年代、2010年代と、それぞれの時代で、大学生の時間的展望の様相が異なることを明らかにしている。奥田 (2013) が2012年に大学生を対象として実施した結果では、「未来」(28.4%)、「現在」(50.8%)、「過去」(13.5%)、「同じ」(7.3%)となり、今回の結果と比較して、より現在優位性が高い傾向を示している。この結果の差異に関して、2013年に入ってから株値上昇、脱デフレの兆し等から景気回復が期待されるような社会文化的な影響によるのか、それとも、今回の調査対象とした、環境学という未来志向的な学問分野を専攻する大学生の特性に起因するのか明らかでない。この点をより詳細に検討するためには、環

境学以外の分野を専攻する大学生を対象とした同様の追加調査が必要となるであろう。

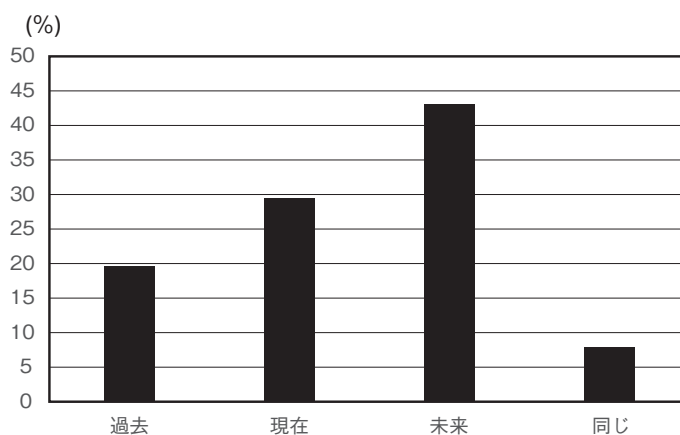


図3 時間的優位性の割合

図4に、サークル・テストの時間的関連性の割合の結果を示す。割合が高い順に「交わり型」(60.8%)、「包含型」(21.6%)、「原子型」(13.7%)、「接合型」(3.9%)であった。

日潟（2008）が大学生を対象とした調査結果では、「交わり型」(37.7%)、「原子型」(27.4%)、「包含型」(19.9%)、「接合型」(6.8%)であり、今回の結果と異なる様相を示す。既述の時間的優位性と同様に、社会文化的な影響によるのか、大学生の専攻分野によるかについてはさらなる検討が必要である。

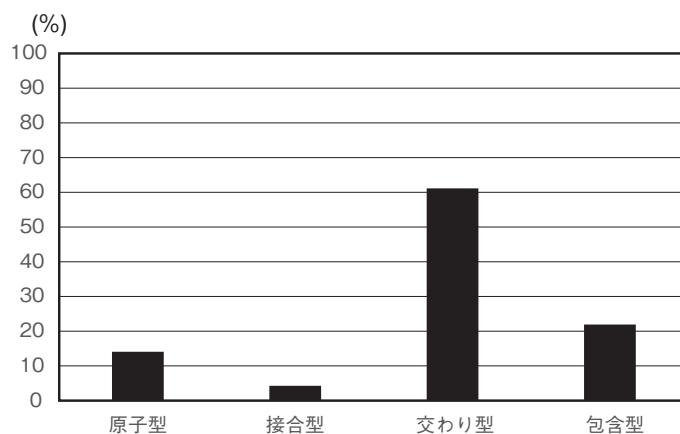


図4 時間的関連性の割合

サークル・テストと自然との一体感、環境意識と行動との関連

表1に、サークル・テストの時間的優位性を独立変数とし、自然との一体感、環境意識と行動を従属変数とした分散分析の結果を示す。いずれの項目においても有意な差は見られなかった。

表1 分散分析の結果 (サークル・テスト・時間的優位性)

	F 値	有意確率	多重比較*
自然との一体感	0.11	.952	
環境問題に対する関心	1.19	.323	
責任感	2.07	.116	
有効感	1.25	.303	
危機感	1.28	.291	
実行可能性感	1.37	.264	
負担感	0.15	.926	
社会規範感	0.28	.838	
環境配慮的意識	0.14	.935	
環境配慮的行動	0.75	.525	
自己効力感／効力予測	1.68	.184	
自己効力感／結果予測	1.30	.284	

*Turkey多重比較

表2に、サークル・テストの時間的関連性を独立変数とし、自然との一体感、環境意識と行動を従属変数とした分散分析の結果を示す。「責任感」($F(3,47)=2.22, p<.10$)、「環境配慮的行動」($F(3,47)=2.22, p<.10$)、「自己効力感／効力予測」($F(3,47)=3.18, p<.05$)に有意な差が見られた。環境に対する責任感の意識が高い人ほど、また環境配慮的な行動を実践している人は、「過去」、「現在」「未来」との関連性に関する評価に違いがあることが明らかになった。日常生活における環境配慮的行動に効力があると予想する人は、時間的関連性評価に違いがあり、「原子型」よりも「交わり型」と評価する傾向が示された。それ以外の項目においては有意な差は見られなかった。

表2 分散分析の結果 (サークル・テスト・時間的関連性)

	F 値	有意確率	多重比較*
自然との一体感	0.38	.771	
環境問題に対する関心	0.24	.871	
責任感	2.22	.098	$p<.10$ 包含型>交わり型
有効感	0.11	.951	
危機感	0.46	.710	
実行可能性感	0.75	.526	
負担感	0.46	.711	
社会規範感	0.21	.889	
環境配慮的意識	0.80	.499	
環境配慮的行動	2.22	.098	$p<.10$
自己効力感／効力予測	3.18	.032	$p<.05$ 交わり型>原子型
自己効力感／結果予測	0.42	.742	

*Turkey多重比較

時間的展望と自然との一体感、環境意識と行動との関連

表3から表6に、時間的展望体験尺度の下位尺度である、「現在充実感」、「目標志向性」、「過去受容」、「希望」のそれぞれを独立変数とし、自然との一体感、環境意識と行動を従属変数とした分散分析の結果を示す。なお、「現在充実感」得点の全回答者の平均値を基準として、平均値

よりも大きい回答者を「現在充実感高群」、平均値よりも小さい回答者を「現在充実感低群」に分類したデータに対して分析を実施した。「目標志向性」、「過去受容」、「希望」についても、同様である。

「目標志向性」に関して、「自然との一体感」($F(1,48)=10.73, p<.05$)、「有効感」($F(1,49)=4.72, p<.05$)、「実行可能性感」($F(3,47)=2.22, p<.10$)に、「過去受容」に関して、「環境問題に対する関心」($F(1,49)=3.44, p<.10$)、「責任感」($F(1,49)=5.03, p<.05$)、「実行可能性感」($F(1,49)=4.64, p<.05$)に、「希望」に関して、「環境問題に対する関心」($F(1,49)=3.22, p<.10$)、「責任感」($F(1,49)=17.78, p<.001$)、「有効感」($F(1,49)=6.12, p<.05$)に、それぞれ有意な差が見られた。上記以外の項目については、有意な差は見られなかった。

表3 分散分析の結果（時間的展望体験尺度・現在充実感）

	F 値	有意確率
自然との一体感	0.28	.602
環境問題に対する関心	0.40	.528
責任感	1.27	.266
有効感	0.16	.692
危機感	1.11	.298
実行可能性感	0.10	.758
負担感	0.63	.430
社会規範感	0.09	.772
環境配慮の意識	0.34	.561
環境配慮の行動	0.94	.336
自己効力感／効力予測	0.47	.494
自己効力感／結果予測	0.00	.960

*現在充実感得点の平均値により高群と低群に分類したデータに対して分散分析を適用

表4 分散分析の結果（時間的展望体験尺度・目標指向性）

	F 値	有意確率	
自然との一体感	10.73	.002	$p<.05$
環境問題に対する関心	0.92	.343	
責任感	1.04	.312	
有効感	4.72	.035	$p<.05$
危機感	0.54	.464	
実行可能性感	3.51	.067	$p<.10$
負担感	0.12	.734	
社会規範感	0.02	.888	
環境配慮の意識	0.13	.720	
環境配慮の行動	0.59	.447	
自己効力感／効力予測	1.43	.237	
自己効力感／結果予測	0.74	.395	

*目標指向性得点の平均値により高群と低群に分類したデータに対して分散分析を適用

表5 分散分析の結果（時間的展望体験尺度・過去受容）

	F 値	有意確率
自然との一体感	0.77	.384
環境問題に対する関心	3.44	.070 p<.10
責任感	5.03	.029 p<.05
有効感	1.05	.310
危機感	0.57	.454
実行可能性感	4.64	.036 p<.05
負担感	0.76	.388
社会規範感	0.02	.899
環境配慮の意識	0.99	.323
環境配慮の行動	0.19	.664
自己効力感／効力予測	0.00	.964
自己効力感／結果予期	0.03	.864

*過去受容得点の平均値により高群と低群に分類したデータに対して分散分析を適用

表6 分散分析の結果（時間的展望体験尺度・希望）

	F 値	有意確率
自然との一体感	1.78	.188
環境問題に対する関心	3.22	.079 p<.10
責任感	17.78	.000 p<.001
有効感	6.12	.017 p<.05
危機感	1.91	.173
実行可能性感	0.60	.440
負担感	1.17	.285
社会規範感	0.95	.334
環境配慮の意識	0.34	.561
環境配慮の行動	0.25	.622
自己効力感／効力予測	0.69	.412
自己効力感／結果予期	2.27	.138

*希望得点の平均値により高群と低群に分類したデータに対して分散分析を適用

今後の課題と展望

本論文は、時間的展望研究で精緻化した研究手法を用いた質問紙調査に基づき、環境学を専攻する大学生の時間的展望の様相を定量的に明らかにした。さらに時間的展望と自然との一体感、環境意識と行動との関係を詳細に把握することができ、時間的展望が環境意識の向上や環境配慮的行動の促進に対して、ある程度、関連があることを示すことができた。これらの成果は、環境意識と行動を考察する上で貴重な研究報告といえる。とはいえ、今回の論文にはいくつかの課題や改善の余地が残されている。以下に本研究の課題に言及し、それらの課題を踏まえながら今後の研究を展望する。

今回の調査では一つの大学の環境学を専攻した1年生のみを対象としたが、同じ環境学に関する専門教育を主とする学部学科であっても、大学ごとに理念やカリキュラムが異なる。また、1

年生はあくまでも大学での専攻科目として環境学を選択していたに過ぎず、調査時点で環境学を十分に修めたわけでない。今後、データサンプリングに配慮した上で上位学年の学生や他大学の学生を対象にした追加調査を実施することで、回答者の属性の違いを踏まえた分析を進めることが結果の一般化を進める際に重要となる。

冒頭で触れたとおり、最終的な目標は、未来展望力や持続可能な未来社会を構想する力をどうしたら獲得できるのかについて明らかにすることであり、そのことを反映した環境学科のカリキュラム及び専門教育を実現することにある。今回の研究を含めて一連の時間的展望研究は、未来展望の現状や未来展望と環境認知や行動との関係性を正確に理解するための道具は提供するが、未来展望力を育成するための処方箋までは提示することはできない。

ところで、近年、実務家が中心となって様々な種類の実践的なワークショップが企画されており、「未来」に焦点を当てたワークショップもいくつかある。その代表的なものに、OUR FUTURES（2013）が推進するフューチャーセッションがある。

フューチャーセッションは、最適解のない複雑な問題を解決するために、企業・行政・NPOなどのセクターの壁、組織内の部署の壁、専門分野の壁など、立場の違いを超えた対話により、協調アクションを生み出す場です。

フューチャーセッションには、次のような特徴があります。

既存の問題設定とは異なる、フレッシュで良質な「問い」の設定から始めること
新たな「問い」に応じた、未来のステークホルダーを選び（キュレーション）、招き入れること
創造的な対話を通して、未来に向けての「新たな関係性」と「新たなアイデア」を生み出すこと
対話だけで終わることなく、ステークホルダー同士が協力して行動できる状況やアクションプランを生み出すこと

(OUR FUTURES, 2013)

フューチャーセッションは参加者の能動的な学びを重視する活動であり、2012年の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて一生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」を受けて、主体的な学び（アクティブ・ラーニング）に教育の質を転換することが求められている大学教育の現場にも有益な示唆を与える。

とはいえ、このようなワークショップの課題としては、ワークショップが単発的なイベントとして実施される場合が多く、伝統的な授業科目やカリキュラム体系の中でどのように位置づけるのかについては明確でない。さらにワークショップの評価や参加者の学びのプロセスについての検証などが十分になされていない点である。

時間的展望の研究者はこれまで主として研究フェーズの“閉じた”アカデミズムを中心に活動している場合が多かったが、今後、実践ワークショップなどに従事する実務家等と協働し、ワークショップの学習プロセスを検証する等のアクションリサーチに勇気を持って参加参画することが、未来展望力や持続可能な未来社会を構想する力の確立に大きく貢献することになるに違いない。

引用文献

- Cottle, T. J. (1976). *Perceiving time*. New York: John Wiley & Sons.
- 古市憲寿 (2011). 絶望の国の幸福な若者たち, 講談社.
- 玄田有史 (2010). 希望のつくり方, 岩波書店.
- 日潟淳子 (2008). 高校生と大学におけるサークル・テストによる時間的展望の検討: 時間的態度と精神健康の関連から, 神戸大学大学院人間発達環境研究科紀要, no.1, 11-16.
- Lewin, K. (1951). *Field Theory in Social Science*. New York: Harper. [猪股左登留訳 (1956). 社会科学における場の理論, 誠信書房].
- 大瀬浩子 (2012). 環境意識と「距離的要素」・「時間的要素」の関連性, 上智短期大学紀要 (32), 79-90.
- 奥田雄一郎 (2013). 大学生の時間的展望の時代的変遷—若者は未来を描けなくなったのか? 共愛学園前橋国際大学論集, No.13.
- OUR FUTURES (2013). フューチャーセッションとは, OUR FUTURES, 2013年4月26日 (<https://www.ourfutures.net/stories/2>) (2013年10月29日).
- Schultz, P. W. (2001). Assessing the structure of environmental concern: Concern for self, other people, and the biosphere. *Journal of Environmental Psychology*, 21, 1-13.
- 嶋野重行・菅原正和・大浪瑠夏 (2003). 時間的展望 (Temporal Perspective) が向社会的行動に与える影響, 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 2, 133-140.
- 白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究, 心理学研究, 65, 54-60.
- 田中幹也・城仁士 (2010). 生活環境におけるエコロジカルマインド評価尺度の開発, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 4 (1), 187-191.
- 都筑学 (1984). 女子青年の時間的展望 (1), 日本教育心理学会総会発表論文集, 26, 420-421.
- 都筑学・白井利明 (2007). 時間的展望研究ガイドブック, ナカニシヤ出版.
- 宇野常寛・濱野智史 (2012). 希望論: 2010年代の文化と社会, NHK ブックス.
- 渡邊恵子・赤嶺淳子 (1996). 大学生のアイデンティティ地位・充実感・時間的展望: 学年差・性差の検討, 人間研究, 32, 25-35.

付表 1 時間的展望体験尺度（白井, 1994）

- 現在充実感：
毎日の生活が充実している。
毎日が同じことのくり返しで退屈だ。＊
今の生活に満足している。
毎日がなんとなく過ぎていく。＊
今の自分は本当の自分ではないような気がする。＊
- 目標指向性：
私には、だいたいの将来計画がある。
私には、将来の目標がある。
私の将来は漠然としていてつかみどころがない。＊
将来のためを考えて今から準備していることがある。
10年後、私はどうなっているのかよくわからない。＊
- 過去受容：
過去のことはあまり思い出したくない。＊
私の過去はつらいことばかりだった。＊
私は過去の出来事にこだわっている。＊
私は、自分の過去を受け入れることができる。
- 希望：
私には未来がないような気がする。＊
自分の将来は自分でできひらく自信がある。
私の将来には、希望がもてる。
将来のことはあまり考えたくない。＊

* 逆転項目

付表 2 環境認知と行動に関する質問項目の一覧

※「環境問題に対する関心」以外はエコロジカルマインド評価尺度（田中・城, 2010）

- 環境問題に対する関心
環境問題の詳しい現状や研究の成果についてもっと知りたい。
環境問題に関する国や自治体の取り組みについてもっと知りたい。
環境問題に関する企業の取り組みについてもっと知りたい。
環境問題に関する分かりやすい説明や解説をもっと知りたい。
環境問題を解決するために自分ができることをもっと知りたい。
環境問題について特集した TV 番組を見てみたい。
環境問題について特集した雑誌・新聞記事を読んでみたい。
- 責任感
家で節電に力を入れるよりも企業（コンビニ、大型スーパーなど）が行うほうが効果的だと思う。＊
地域の川の汚染は、家の生活排水よりも工場などから流れる工場用水が原因だと思う。＊
- 有効感
各家庭で、生活排水の浄化に心がけても、地域の川はきれいな状態を保てないと思う。＊
自分一人がごみを減らす努力をしても環境を守ることができないと思う。＊
- 危機感
ごみが増えても自分たちの生活に影響がでるとしてもまだまだ先の問題だと思う。＊
- 実行可能性
家で、紙のリサイクルがしにくいのは、家に保管しておく場所がないからだ。＊
生活排水の浄化に協力しにくいのは、調理くずや食べ残しの適切な処分の仕方がわからないからだ。＊
- 負担感
空き箱や包装紙までリサイクル回収に出すのは面倒だ。
毎回、油やマヨネーズなどの汚れがひどい食器を、拭いてから洗うのは面倒だ。
今まで省エネルギーに努める習慣が備わっていないため、省エネルギーには積極的になれない。
- 社会規範感
家族は、あなたに家で使用する電気を節約してほしいと思っているようだ。
- 環境配慮の意識
エネルギー問題や、将来のことを考えて日々の生活で省エネルギーを心がけたい。
生活排水の浄化対策を市町村から呼びかけられたら協力したい。
日頃から、できるだけゴミを減らすように気をつけたい。
- 環境配慮の行動
家では、川への負担が軽くなるように、炊事・洗濯の仕方に工夫している。
コンビニやデパートなどで過剰包装を断るようになっている。
電気製品を購入する際には、環境のことを考え、意識的に省エネ家電を選ぶようにしている。
- 自己効力感（効力予測）
環境のことを考えて、普段から余計なごみを出さないように心がけることができる。
自分は、日々の生活で、環境のことを常に意識して部屋の電気などをこまめに消すことができる。
家で、食器の油をふき取るなど正しい処理を徹底することができる。
- 自己効力感（結果予測）
自分が、台所や洗濯などの生活雑排水の浄化に配慮すること地域の川の生き物を守ることができる。
使い捨てのものをなるべく買わないようにすることで、家の中のゴミが減って手間を省くことができる。
省エネ家電を積極的に購入することで、家の電気代負担を減らすことができる。

* 逆転項目